

益田古峯小伝：九州大学「益田文庫」の旧蔵者

柴田，篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：教授：中国哲学史

<https://doi.org/10.15017/13331>

出版情報：中国哲学論集．34，pp.61-101，2018-12-08．九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：



中国哲学論集第三十四号抜刷
平成二十年十二月発行

益田古峯小伝

—九州大学「益田文庫」の旧蔵者—

柴田篤

益田古峯小伝

—九州大学「益田文庫」の旧蔵者—

柴 田 篤

はじめに

九州大学附属図書館には「益田文庫」というコレクションが存在する。約二千冊、五百部に及ぶ書物から成り、漢籍、和書の線装本の外、洋装本を含む。現在、六本松分館（旧教養部分館）に混排されている。^①故岡田武彦名誉教授（当時教養部教授、一九〇八〜二〇〇四）は、昭和四三年（一九六八）四月発行の「図書館情報」三二号（九州大学附属図書館）所載「碩水文庫雑感」の中で、次のように記している。

因みに、碩水先生の門人益田古峰氏の旧蔵の書物は本学教養部図書館に古峰文庫として収蔵せられていることを付記しておく。

碩水先生とは幕末・明治期に活躍した朱子学者・楠本碩水（名は孚嘉、一八三二〜一九一六）のことで、その旧蔵書は昭和八年（一九三三）に九州大学が購入して、附属図書館中央館に「碩水文庫」として収蔵されている。^②門人益田古峰氏とは、針尾に創られた私塾「鳳鳴書院」で碩水に学び、その後、昭和初期まで福岡県中学修猷館（福岡県立修猷館高等学校の前身）の教師を務めた益田祐之氏（号は古峯、一八六六〜一九四四）のことである。その旧蔵書は九州大学が受け入れ、昭和四一年（一九六六）三月二二日付で登録されている。^③岡田教授は「古峰文庫」と記してい

るが、図書館においては登録後、「益田文庫」と呼称したようで、整理用カードには「益田文庫」と記されており、また手書で伝わる目録にも「益田文庫目録」と表記されている。^④ 文庫成立前後のことについては、昭和四二年（一九六七）四月一五日に発行された『益田古峯漢詩鈔』^⑤の「あとがき」の中で、三男の益田豊彦氏が次のように述べている（昭和四二年一月）。

ところがかねがね散逸をおそれていました父の蔵書を、一括九州大学教養部に寄贈しましたところ、思いも設けぬ謝礼金を頂きました。この謝礼金は何とか父をしのぶよすがになるような使い方をしなければならぬと考えました。古峯詩集はこれをもとにしてできたものであります。

益田古峯の旧蔵書が九州大学に寄贈された（実際には校費十三万円で九州大学が備品として購入した）のは、恩師である楠本碩水の兄端山（名は後覚、一八二八〜一八八三）の孫に当たる楠本正継（一八九六〜一九六三）九州大学名誉教授（中国哲学史講座）と、その教え子である岡田武彦教授との関係によるものと推測される。「益田文庫」の旧蔵者である益田古峯については、豊彦氏が前掲「あとがき」の中でその生涯を簡略に述べているほかには、従来殆ど明らかにされてこなかったが、最近になって、石瀧豊美氏が益田豊彦氏の生涯を綴る中で、その概略について記している。^⑥ 本稿は、『益田古峯漢詩鈔』所収の漢詩や「あとがき」、また『修猷館二百年史』、『修猷館同窓会雑誌』などを参考にしながら、益田古峯の生涯について考察をした上で、「益田文庫」所蔵書に関して若干の検討を行うものである。

一 少年時代―秋月・山口―

益田古峯は、慶応二年（一八六六）一二月二九日に筑前秋月（現福岡県朝倉市秋月）の下級士族の家に生まれる。名は祐之。生後一年余りで、母・雪と共にその実家に戻ることになるが、この間の詳しい事情は明らかでない。三男・豊彦氏によれば、幼少の頃から母に四書五経の素読を教わったという。明治九年（一八七六）一〇月二七日、藩閥政

府の諸改革に反抗して今村百八郎ら旧秋月藩士が決起する。秋月党の挙兵、所謂「秋月の乱」である。この蜂起の盟主の一人であつた益田静方（号は慶堂、一八五〇〜一八七六）は、古峯の母・雪の弟に当たる。大橋陶庵の門に学んでおり、後に所謂「萩の乱」を起こすことになる前原一誠（一八三〇〜一八七六）とも交流があつた。彼は今村百八郎らと共に蜂起を決め、同志の支援を求めるために佐賀に向かう途中で逮捕される。蜂起は鎮圧され、一二月三日、福岡にて裁判が開かれ、静方は今村と共に、「朝憲を紊乱せんと企て」た罪により、即日斬首の刑に処せられる。享年二十七であつた。静方は処刑の前に漢詩一首を記している。

従来世事奈難成

従来世事 奈ぞ成り難き

頭斷場辺無限情

頭斷場辺 無限の情

呼賊呼狂任人笑

賊と呼び狂と呼ぶ 人の笑うに任す

微忠報国寸心明

微忠国に報ゆ 寸心明らかなり

古峯はこの年十歳であつたが、大切な後ろ盾を失つたと言える。志半ばで散つた静方無念の最期は、この絶命の詞と共に古峯の胸に深く刻まれ、その生涯に大きな影響を与えることになる。

大正一四年（一九二五）に出版された川上市太郎（号は水舟）著『秋月黨』（福岡東西文化社刊、後に一九七〇年、亀陽文庫改訂刊）によれば、翌明治一〇年（一八七七）夏の暮れに、陶庵門下の高橋武（越後出身）が身をやつして静方の墓参に秋月を訪れ、時期を見て祐之が上京するよう、母・雪に伝えている。川上水舟は、「益田逸叟の愛孫祐之氏は、乱後、志を立て、上京し、同志の愛撫指導する所ありしは、実にや志士の交り、頼み甲斐ある互ひの床しさ想ひやられます」（同書）と記している。益田逸叟とは静方の実父である。静方と同門の人々が、甥に当たる古峯の養育に心を配つたことが分かる。

明治一二年一二月三日、益田静方の三周忌に当たり、東京向島魚十楼で追悼会が催される。祭壇には学友の栗本義喬が描いた肖像が懸けられ、大橋陶庵以下、同志が参集しようである（同書）。この大橋陶庵と栗本義喬は、後の古峯の人生に大きな影響を与えることになるが、その前にもう一人重要な人物と出会っている。山口県令・関口隆吉

である。

関口隆吉、字は良輔、号は黙斎。天保七年（一八三六）、幕府御持弓与力・関口隆船の子として江戸に生まれ、十七歳で父の職を襲う。二十三歳の時に大橋訥庵の門に入り、熱烈な尊王攘夷論者となる。文久二年（一八六二）、大橋訥庵父子の下獄に伴い、職を辞し、義弟に家を譲る。この頃教授した者の中に栗本義喬がいる。明治五年（一八七二）には、三潯県（現福岡県三潯郡）参事、山形県参事に任ぜられ、同八年には山口県令となる。同一四年、元老院議員を経て、同一七年に静岡県令、同一九年には初代静岡県知事となるが、明治二年（一八八九）四月に列車事故で負傷し、五月一七日に逝去する。師であつた大橋訥庵の甥・隆正（一八五六―一九二六）を養子とするが、後に長男・壮吉が家を継ぐ。次男・出（一八七六―一九六七）は元幕臣新村猛雄の養子となる。後年、言語学者として名を成した新村^{しんむらた}出である。^⑩

古峯はこの関口隆吉が山口県令であつた明治一〇年（一八七七）頃に引き取られ、手厚い庇護を受けることになったようである（前掲「あとがき」）。関口隆吉と益田静方が共に大橋訥庵・陶庵による思誠塾の同門であつたという関係と、静方の同志たちの仲介によるものと思われる。当時まだ幼なかつた新村出は、後に回顧して、「福岡出身で山口において父の家に寄寓した剛直な青年が居た」（「わが学問生活の七十年」一九五五年、『新村出全集』第十四巻、二五五頁）と述べている。

二 青年時代―小梅・佐原―

その後、益田古峯は東京小梅^{こうめ}にあつた大橋陶庵の私塾「思誠塾」に学ぶことになる。関口隆吉が明治一四年（一八八一）二月に元老院参議に転ぜられて上京するので、その機会にであつたか、あるいはそれ以前であつたかは定かでない。「思誠塾」は大橋訥庵（一八一六―一八六二）が天保十一年（一八四一）に開いた家塾であつた。最初、日本橋橋町にあつたが、安政二年（一八五五）の大地震の後に、郊外小梅村に移り、訥庵没後は養嗣子の陶庵（名は正燾

一八三六（一八八一）が後を継いでいた。⁽¹⁾ 大橋訥庵は、長沼流兵学者の家に生まれるが、陽朱陰王と言われた佐藤一斎の門に入り、やがて陽明学を排して朱子学を一尊し、過激な尊王攘夷論者となる。文久二年（一八六二）に老中・安藤信正襲撃計画が発覚し捕らえられ、出獄後に病死する。

関口隆吉が大橋訥庵と深い関わりを持っていたことは前述の通りであるが、古峯は恐らくその薦めにより、小梅の思誠塾で大橋陶庵に学ぶことになる。昭和一八年（一九四三）に出版された『大橋訥庵先生全集』（平泉澄・寺田剛編、至文堂）下巻附録の「思誠塾規」（大橋陶庵撰）のうち、「思誠塾則」（明治二年一〇月、十二条）並びに「思誠塾生徒心得書」（明治四年二月、十四条）は、益田古峯手写所蔵のものを底本としている。朋友のあり方を述べた「思誠塾生徒心得書」第一条を、次に掲げる。

一、朋友ハ謙遜辞讓信義ヲ以テ可交事勿論ニ候。学業爵禄年長之類ヲ挾ミ、儕輩ヲ輕侮致候様ナル事ハ、堅相慎可申候。乍去忠告善導ハ朋友之道ニ候得共、万一心附候事有之節ハ無憚幾度モ物靜ニ可被申論候。陽ニハ棄置候而、陰ニハ謗議輕慢致候様ナル儀ハ、深ク戒可申事。

少年ハ能ク和順ニ長者之言ニ從ヒ可申候。少モ妄慢致、差出ケ間敷様之事堅相慎可申。長者ハ少年ニよく目ヲ挂成丈過失なき様心附可被申事。

さて、陶庵が明治一五年（一八八二）八月六日に没したため、栗本義喬の家塾のある佐原に移ることになったようである。古峯はこの年、十六歳であった。⁽²⁾

江戸時代、利根川の舟運で栄えた佐原（現香取市）は、明治八年（一八七五）に千葉県に編入されて香取郡佐原村となり、同一一年（一八七八）には香取郡役所が設置され、同一三年（一八八〇）には川崎銀行佐原出張所（後の三菱銀行佐原支店）が設立されている。江戸時代に引き続き、各種の卸売および小売業と、醸造業を中心とする製造業で栄え、明治時代において佐原は県内屈指の商業都市であった。明治二年には佐原町と改称し、三一年には成田鉄道成田・佐原間が創業するが、古峯が佐原にいた頃は、まだ鉄道は開通していなかった。⁽³⁾

栗本義喬（一八四五〜？）は越後出身で大橋訥庵の門下であったが、朱子学者・並木栗水の娘婿となる。並木栗水

(名は正韶、一八二九～一九一四)は久賀村御所台(現多古町)の出身で、二十一歳で江戸の大橋訥庵に学び、文政一二年(一八二九)に佐原に移住し、安政三年(一八五七)に佐原横川岸の伊能七左右衛門の長屋で螟蛉塾を開く。慶応三年(一八六七)に栗水は郷里の御所台に移り、そこに新たに螟蛉塾を開くことになる。これに伴い、栗水の娘婿であった栗本義喬が佐原の塾を継承して中川岸で開塾し、のち神明町の常照寺に塾を移し、明治二〇年頃まで続いた。学科は漢文読法・経学・和漢歴史学・文章学・詩学・習字などであった。

古峯が佐原に來た頃は、螟蛉塾は常照寺にあった。常照寺(現千葉県香取市佐原イ一〇五一番地)は臨済宗妙心寺派に属し、山号を長寿山といい、もと大竜寺(与倉)の末寺に当たる。戦国期、大竜寺十世・常照義舟禪師が与倉村に創建したと伝えられていたが、近年になって、江戸の明和年間に一燈法顯禪師が佐原に常照寺を開いたことが明らかになった。明治になって廃寺のようになっていたところを、栗本義喬が借り受けて、漢学塾を開いていたのである。当時の螟蛉塾の様子については、明治一七年(一八八四)九歳の時から明治二〇年(一八八七)十二歳の時まで、三年ほどここで学んだ新村出が以下のように書き残している。

千葉県の佐原、伊能忠敬で名高い利根河畔の丘陵地の寺子屋式の村塾に三年、新東京の文明開化の悪風から隔離されての漢学塾に厳父から入れられた。(『私の十代』一九五五年、『新村出全集』第十三卷、二九六頁)

塾は廃寺のあとで、仏壇などは取り払ってもはや仏くさい感じはなかったが、まれには法要に使用された。

(『回想十話』一九六二年、同右第十四卷、四四六頁)

また、栗本義喬とその塾風については、次のように記している。

きびしい人だった。十四五人の塾生たちへの講義は、昼も夜も『論語』であり、『孟子』である。講義が分からず、居眠りをよくやった。すると忽ちゲンコツがとぶ。しかし家に帰りたいとか、泣き出すとか、いうことはなかった。すなおに塾とはこういうもの、とのみこんで、わき目もふらず、世間のことも知らず、新聞なども開くことなくただ『論語』『孟子』『史記』などを読み続けた。

(『恩師』一九六三年、同右第十四卷、四五九頁)

当時の益田古峯については、次のように記している。

益田（祐之）は亡父の家の玄関番をした神風連の亜流を父にもち、朝日新聞社の豊彦君はその人の子である。父君は、私が栗本塾にいた十歳前後の時分には、まだチョンマゲに結び、栗本先生ももちろん同様であった。¹⁶

（私の蛩雪時代）一九四八年、同右第十四巻、二四〇頁

私が山口に生まれ育ったところに、同地の道場門前町の何川といったか名をいまは全く聞きおぼえない狭く浅い川の、橋のそばに父母が住居した古い家に寄寓中の少年が、すでに成長して青年の時分であつて、私を親切に、しかし厳格に、教育するの任をひきうけてくれて、私の実家の移転した静岡の母との連絡を緊密に保ち、さまざまの恩義に浴した。寺蹟の塾から向こう正面の奥の方に存した墓地にまで抱いていつて、何かの厳罰が懲らしめか、懲罰やら仕置きを一度受けたことも忘れがたい。

（回想十話）一九六二年、同右第十四巻、四四六頁

また、新村出は當時を回顧して次のような歌を作っている。

いとけなき 童べのむかし おもほえて 佐原香取は なつかしきかな

諏訪の岡の ふもとの鄙の 寺小屋に ただ漢籍の 物学びせし

春の夜の 狐のよめいり 田のくろの 堤（提）灯並ぶ 行列も見し

寺庭の 古き榎の木に 朧夜を 腹鼓うつ 狸もきぬ

『佐原市史』九〇五頁、佐原市役所、一九六六

当時の佐原の塾における塾生たちの生活ぶりが目に浮かぶようである。古峯自身がこの蛩蛉塾について語ったものはほとんど残っていないようであるが、『益田文庫』には『講余吟草』と題した二冊の稿本が収められている。その第一冊は、明治一五年から一八年にかけての漢詩草稿であり、冒頭の思誠塾における「草稿」（明治一五年）以外は、すべて佐原の塾で綴られた古峯早期の習作である。題の下に「課題」、「蛩蛉塾課題」、「常照精舎課題」と記されているものもあり、作詩が塾の科目の一つであったことが分かる。詩句の下に「以上二首栗里先生正刪」、「以上二首佐久間君」、「以上三十首大橋路卿君叱正」などとある。欄外には、「コノ転句ノ字ノ如キハ決シテ詩ナゾニ用ユベキ字ニ非ズ」、「少シ詩調ニ乏シ」、「今一考セバ好詩トナラン」、「詩ハ如此ヲ佳トス」、「佳作」などと朱筆されており、師友の刪訂を受けながら作詩に励んでいた様子が窺える。次に、「佳作」と評された、「春江晚歩」（明治一七年）の詩を挙げる。

水色蒼茫雨後天

水色蒼茫 雨後の天

隔江漁舍起炊烟

隔江の漁舍 炊烟起つ

長隄十里春寥寂

長隄十里 春寥寂

幾点閑鷗夕照辺

幾点の閑鷗 夕照の辺

ともかく、益田古峯も新村出も、この佐原の漢学塾でひたすら漢文を読み、漢詩を作り、漢学を学んだのである。やがて、一人は地方中学の漢文教師を務める漢詩人となり、一人は日本を代表する言語学者へと、それぞれ別々の道を歩むことになるのではあるが。

ところで、古峯は思誠塾以来の同門である菊池惺堂（一八六七～一九三五）と特に親しい交わりを持ったようで、生涯の友人となった。惺堂は名を晋二と言ひ、大橋陶庵の長男であつたが、菊池経政の養子となり、思誠塾に学び、佐原の栗本塾の塾頭を務める。書画を能くしたようで、新村出は、「号を惺堂といつて南画や漢文を能くした温厚な銀行家であつた」、「塾生の帰服した徳望家であつた」と記している（前出「わが学問生活の七十年」）。

明治一八年（一八八五）一月、古峯は佐原を離れることになる。『講余吟草』第二冊に、「明治十八年一月、將に東京に之^ゆかんとして、佐原河岸^{より}従り汽船に投じ、作有り」として、次の詩がある。

一声汽笛辞河岸

一声汽笛 河岸を辞す

瞬息輕過灣又灣

瞬息輕過す 灣又た灣

月湧波心如白昼

月 波心に湧き白昼の如し

分明常照寺頭山

分明なり 常照寺頭山

このように、三年間を過ぎた常照寺蟬蛸塾との別れを記した後、『吟草』には師友との別離の情を詠った漢詩が綴られている。東京に出て恩師大橋陶庵の墓参などをすませた後、古峯は山口県の保津^{ほうす}に滞在したようである。「益田文庫」所蔵の自写本『大学正文』末尾には、「歳次旃蒙作噩立春前五日於防州保津惺舍北窓之底騰了 益田祐之大甫」と記されている。乙酉の年は明治一八年にあたる。また、同自写本『靖献遺言批評』（東沢瀉著、一冊）末尾

には、「明治十又八年晚秋於防州沢瀉精舎東窓之底騰了焉」と、更に、同自写本『儒門語要』（倪元坦撰、六卷、三冊）の末尾には、「明治十九年一月中旬於周防国保津惺舎北窓之下写了中卷南部君所贈也 益田祐之大有甫」と記されている。これらによれば、明治一八年の春から明治一九年に至る間、古峯は防州岩国の保津にあつた沢瀉塾に滞在していたようである。幕末維新期の陽明学者である東沢瀉（名は祐利、一八三二〜一八九二）が保津村沢瀉おもたかに開塾し、明治一七年（一八八四）には一旦閉塾するが、息子の正堂（名は敬治、一八六〇〜一九三五）が後を継いでいた。前掲『講余吟草』第二冊は、この時期の詩作、並びに抜き書き帳となっている。

明治一八年八月、古峯は菊池惺堂と共に下関から海路博多に至る（八月三十一日）。おそらく久方ぶりの九州の地であつた。後に古峯はその時のことを回顧して、次のような詩序を著している。

八月三十一日、例年、概ね二百十日の前日と為す。顧みるに、明治乙酉（一八八一年）、惺堂と共に偶是ともたまの日を以て馬関（下関）を發し博多に至る。狂瀾奔盪、頗る船量に悩む。指を屈すれば已に四十四年なり。『漢詩鈔』前編・六五丁）

そして、明治二〇年二月、古峯は肥前針尾の楠本碩水の塾に入門することになる。おそらく碩水と交流のあつた東沢瀉・正堂父子の紹介によるものと推測される。¹⁹ちょうどその年に、佐原の栗本義喬の家塾が閉じられている。

三 塾生・記者の時代―針尾・福岡―

「鳳鳴書院」は明治一五年（一八八二）八月に、幕末平戸藩の藩儒であつた楠本端山・碩水兄弟によつて針尾に創建された私塾である。²⁰開塾以来、一六年には四十一名、一七年には三十九名と、多くの入門者があり、岡直義（号は彪邨、一八六四〜一九四九）・貞方研（通称は弥三郎、一八六八〜一九五七）といった幾多の俊秀を輩出していた。しかし、漢学衰退の風潮の中で、二〇年（一八八七）年以降はその数も激減していく。益田古峯が入塾したのは、まさにその年の二月であつた。「鳳鳴書院」の入塾者の氏名を記した「登門録」にその名が見える。²¹この年、二十一歳

を迎える。また、菊池惺堂も鳳鳴書院に入門したようである『過庭余聞』九丁参照。

端山・碩水兄弟は、二十代の時に江戸に遊学して佐藤一斎の門に学ぶが、一斎は高齢のため、その高弟の吉村秋陽や大橋訥庵に教えを受けることになる。特に端山は、大橋訥庵に心服し、「此の人に逢わざれば、殆ど虚しく一生を過ごさん」と後に述懐している『端山自著年譜』嘉永五年二十五歳条。江戸から帰って後、兩人は月田蒙斎（一八〇七〜一八六六）から崎門（山崎闇斎学派）の伝授を受け、以後崎門の学問の講究と顕彰に尽くすことになる。また、碩水は並木栗水などと書簡による思想論争を繰り広げている。このように、楠本端山と碩水は、古峯が学んだ朱子学と必ずしも同じ学風ではなかったが、関東で古峯と関係のあった人々と学問的交流が深かったと言える。

ところで、「鳳鳴書院」は、明治二〇年代に入って次第に入塾者が減少し、明治二九（一八九六）年一二月初めに遂に閉鎖・解体されることになる。古峯は入塾から三十三年経った大正九年（一九二〇）、「針峽歌寄懷楠本君翔」という七言詩を作り往時を偲んでいる『漢詩鈔』前編・二五丁。楠本君翔とは、楠本端山の息子・楠本正翼（号は海山、字は君翔、一八七三〜一九二二）のことである。

針峽は、肥前針尾島に在り。潮流矢の如く、驚濤洶湧し、勢い山嶽を撼がし、響き百雷の如し。蓋し、天下の壯觀なり。楠本端山・碩水二先生、峽北に居りて学舎を建て、以て子弟を教育す。号して鳳鳴書院と曰う。四方より来り学ぶ者甚だ多し。余も亦た嘗て碩水先生に侍するを得たり。今を隔つること三十余年。先生逝きて書院も亦た廃せらる。而れども端山先生の令嗣君翔、家学を奉じ、居然として本邦の宿儒たり。聖学未だ地に墜ちずと謂うべし。偶時事に感ずる有り。針峽の歌を作り以て寄す。時に大正庚申二月三日なり。

針峽怒潮蹴天来

飛舞奔騰響如雷

震撼山嶽動地軸

驚濤崩処雪成堆

中有小嶼屹然峙

針峽の怒潮 天を蹴って来り

飛舞奔騰 響 雷の如し

山嶽を震撼し 地軸を動かし

驚濤崩るる処 雪 堆を成す

中に小嶼有り 屹然として峙ち

欲叱海若鞭蛟兇

譬如勇士挺身敵王愾

雖千万人吾往矣

鳳鳴書院在于此

聞風嘗聚天下士

觀潮望嶼鍊其膽

發憤直欲濟屯否

鳳飛人散三十年

可歎倏忽世運遷

正氣不振綱維弛

滔滔橫議滿坤乾

廻狂瀾於既倒人誰在

小嶼回首翠依然

海若を叱り 蛟兇を鞭たんと欲す

譬えば勇士の身を挺して王愾に敵し

千万人と雖も吾往かんとするが如し

鳳鳴書院 此に在り

風を聞いて嘗て聚まる天下の士

潮を觀 嶼を望んで 其の膽を鍊り

憤を發しては直ちに屯否を濟わんと欲す

鳳飛び人散じて三十年

歎ずべし倏忽にして世運遷り

正氣振わず綱維弛み

滔滔たる横議 坤乾に滿つ

狂瀾を既倒に廻らすの人 誰か在る

小嶼首を回らせば翠依然たり

ところで、古峯は明治二三年（一八八九）、二十三歳の年に、近藤静と結婚する。近藤家は楠本家と姻戚関係にあることから、碩水の勧めによると考えられる。⁽²³⁾そして、益田豊彦の前掲「あとがき」によれば、古峯はこの頃「福陵新報」の記者となったようである。

「福陵新報」は、明治二〇年（一八八七）八月に玄洋社の機関誌として創刊され、初代社長は頭山満（一八五五～一九四四）であった。頭山は「秋月の乱」に際して秋月党に参加せんとして断念したというから、そのあたりの関係から古峯の入社があつたのかも知れない。「福陵新報」は、明治三二年（一八九八）に「九州日報」と改題し、昭和十七年（一九四二）には「福岡日日新聞」と合併し、「西日本新聞」となる。『西日本新聞社史―創刊七十五年記念―』（西日本新聞社、一九五二）の「第八篇 九州日報五十五年史」によれば、明治二三年（一八八九）八月一日の創刊

二周年の号に、益田祐之の名が見える。古峯は、翌三年（一八九〇）四月二六日に明治天皇佐世保鎮守府開庁式行幸報道のため佐世保に、また、明治三五年（一八九二）には特別議会議会報道のため東京に、それぞれ特派されている。

『益田古峯漢詩鈔 前編』によれば、明治三五年春、母を伴い、東京及び京都・大阪に遊んでいる。苦勞をかけた母親に対する孝養であつたのだろう。『西日本新聞社史』によれば、明治三九年（一八九六）三月の「福陵新報」編集局陣容の中には、既にその名は見えない。²⁴ 古峯が「福陵新報」を離れた経緯と時期などは定かでないが、明治三一年（一八九八）には、東筑中学校の雇教師を勤めることになる。

東筑中学校は、同年六月に、福岡県東筑尋常中学校として嘉穂郡飯塚町に設立される。同三二年（一八九九）四月、福岡県東筑中学校に、明治三四年（一九〇一）福岡県立東筑中学校に改称される。現在の福岡県立東筑高等学校の前身である。「益田文庫」所蔵『勸学編』（張之洞撰、光緒二十四年刊、上下二冊）の奥書には、「明治三十二年二月岡幸七郎子自清国湖北漢口所贈 余時奉職於東筑中学校在飯塚 益田祐之識」とある。

明治三三年（一九〇〇）、古峯は中学教員検定試験に合格し、三月に中学修猷館（福岡市）の教師となる。時に古峯三十四歳であつた。

四 教師の時代—中学修猷館—

旧福岡藩校修猷館は天明四年（一七八四）に福岡藩東学問稽古所として開設され、専ら朱子学を講じた。明治四年（一八七二）三月に藩学校と改称され、一〇月には廃止される。同一四年（一八八一）に開講した私学藤雲館を同一八年（一八八五）に廃館し、そのあとに福岡県立修猷館を設置する。同三二年に福岡県立尋常中学修猷館、同三三年に福岡県中学修猷館、同三四年に福岡県立中学修猷館、さらに大正一四年に福岡県中学修猷館とそれぞれ改称する。現在の福岡県立修猷館高等学校の前身である。古峯は明治三三年に福岡県中学修猷館の漢文担当教諭となり、以後三十年間ここで過ごすことになるが、科目以外の活動として特に顕著であつたのは、『同窓会雑誌』の発行であつた。

『同窓会雑誌』は、修猷館の卒業生で東京帝大在学中の広田弘毅（一八七八～一九四八、のちの内閣総理大臣）ら同窓生が、明治三五年（一九〇二）八月に小寺甲子二館長にはかり、在校生らにも呼びかけて発刊することになったものである。先ず同窓会雑誌部を設置し、「同窓会雑誌部規則」を決定する。「同窓会の一部」（第一条）である雑誌部は、「文学思想を養成し文章を研磨する」ことを目的とし（第二条）、「六月二十日、十一月三十日、二月二十日」の一年三回、雑誌を発行する（第七条）こととした。雑誌部には「部長一名監事八名」（第三条）が置かれたが、「本部の事務を統管」する（第五条）初代の部長として選任されたのが益田古峯であった。『同窓会雑誌』第一号は同年一月五日に発行されるが、巻頭に同窓会長の小寺館長の「修猷館同窓会雑誌発刊に付生徒に告ぐ」に続いて、益田部長の「会員諸君に告ぐ」が掲載される。その中で古峯は、雑誌部の事業が「重き責任と困難とを有すること」を述べ、所見として次のように記している。

抑も言語が其人の気象品性を隱約の中に表白するが如く、文章も亦其人の心術学識を不知不識の間に露出するものたること勿論にして、健全なる学生の声は自ら剛健雄大に、不健全なる学生の声は常に纖弱卑陋なるを免れざること、東西古今を通じて疑うべからざる事実なることを信ぜば、諸君が本誌に掲ぐる所の議論文章を以て、直に我が修猷館生徒の声として、否寧ろ我修猷館の声、即ち其内容として、世人が之を認識するに躊躇せざるべきこと記憶せざるべからず、況や軀（からだ）では国民の重要な位置を占むべきもの、声たるに於てをや、

この格調高い文章には、古峯の言語や文学に対する考え方がよく表現されていると²⁶言える。以下、『修猷館二百年史』と『同窓会雑誌』（大正一五年五月から『学友会雑誌』となる）とによって、益田古峯の修猷館教諭としての歩みを辿っていくことにする。

古峯は、『同窓会雑誌』発刊当時、同窓会剣道部の部長を務めていたが、翌明治三六年には「都合に依り辞任」（同三号）したようである。明治四三年（一九一〇）五月三〇日、修猷館は創立二十五年を迎える。講堂で行われた創立記念祝賀会の中で、古峯は勤続十年ということで記念品の贈呈を受ける。

大正元年（一九一二）一月二日、旧天長節の式典で、館長の告示の後、古峯が講話を行っている。以後、しばし

ば式典等において講話を行っている。たとえば、大正三年（一九一四）五月七日、柔道場に講道館主嘉納治五郎の「順道制勝」額が掲げられ際、題書の意について講話を行う。また、同月三〇日の創立記念日には、館長の講話に続いて、『書経』の微子之命篇についての講話を行っている。該篇に見える「爾、惟れ厥の猷を踐み修め、旧しく令聞有り」の文章は、館名の典拠である。少年期から身につけた漢学の素養が遺憾なく發揮されていたと言える。

同年八月一七日、天神町徳永で卒業生の組織である館友会が開かれ、古峯も出席する。席上で翌年の創立三十年記念事業として、図書室を兼ねた集会室の建築が決まる。卒業生、生徒父兄の賛助を得て、翌四年（一九一五）五月三〇日の記念式当日に平屋建て、外観はセセッション式洋風建築、内部は畳敷き書院造りの集会施設「菁莪堂」の献堂式が行われる。「菁莪」は『詩経』小雅の菁莪者我篇から取ったもので、優れた人材を育成する場となることを寓意していた。同年七月発行の『同窓会雑誌』第三十九号「創立三十年記念号」には、益田古峯の「菁莪堂記」が掲載されていることから、「菁莪堂」の命名は古峯によるものであることがわかる。「菁莪堂記」（原漢文）の中で次のように述べている。

今、我が邦、文運日に開け、中学の設置、都鄙に遍く、盛んなりと謂うべきなり。然れども師弟の間、動もすれば輒ち相ひ疏隔す。是を以て、教育日に盛んなるも、風俗日に敗れ、学制愈々備わるも、而も世道愈々降る。師道或いは未だ尽きずと雖も、抑々亦た子弟の善く学ばざればなり。²⁷

古峯は、師弟の間柄が密接なものとなるための場として「菁莪堂」が活用されるように願っており、「斯の堂、館と相い表裏し、実に教化の本、成徳の原と為る」と記している。この「菁莪堂記」は、大正七年（一九一八）一月に古峯自身の筆になる額（大正四年歳次乙卯八月 益田祐之撰并書）が床の間に掲げられた。²⁸

これより前、大正四年には大正天皇の即位式があり、修猷館でも御大典記念行事が行われたが、その機会に寄宿舎が「報告寮」と命名され、西寮に新設された親睦室の正面に、古峯の筆になる「報国」の大額が掲げられた。大正九年（一九二〇）五月三〇日、創立三十五年記念式において、古峯は勤続謝恩（二十年三ヶ月）の記念品を贈られている。

大正三年（一九一四）より「乃木將軍追慕会」（九月一三日、遠足行軍）が始まるが、大正一〇年（一九二一）は降雨のため当日行軍だけが行われ、翌日講堂にて館長と古峯の講話が行われている。

大正一〇年七月発行『同窓会雑誌』第五十一号の巻頭の辞は、館名の由来と館生の使命に関する檄文であり、署名こそないが、益田古峯が著した文章と思われる。

大正一二年（一九二三）五月二六日に創立記念式が挙行され、古峯はこの時も『書経』の微子之命篇についての釈義を行っている。

大正一三年（一九二四）一〇月一七日、修猷館と生徒の家庭との教育上の連絡を親密にし、更に教育事業を助成することを目的として、「父兄会」が発会する（後に「修猷館後援会」と改称する）。古峯は発足時に、白坂栄彦館長、小川直熙教諭と共に顧問になっている。

大正一四年（一九二五）五月、修猷館は創立四十年の記念式と卒業生三千人祝賀会を挙行したが、同月発行の『同窓会雑誌』第五十九号「創立四十年卒業生三千人」記念号の中で、古峯は七言詩一篇を寄稿している。同年九月一三日の「乃木將軍追慕会」でも、講話を行っている。

大正一五年（一九二六）四月、修猷館同窓会は「修猷館学友会」と改称するが、古峯はその副会長となる。同年六月一〇日午前、講堂にて李王殿下国葬のための遙拝式が挙行され、式後に古峯が訓話を行っている。大正期、古峯は既に館長に次ぐ重要な地位にあつて、時には館長の代理としての役割を果たしていたようである。

昭和二年（一九二七）、大正天皇御大喪儀につき講堂において遙拝式が挙行され、式後、古峯は御大喪儀参列のため上京中の館長の代理として訓話を行う。

同年六月二二日、福岡中学校が不慮の火災によって焼失したので、翌日、古峯は各学年一組組長を同伴し、学校、生徒を代表して福岡中学校を見舞っている。同年九月一三日の「乃木將軍追慕会」の日、生徒たちは午前四時に赤坂門に集合し、八時三十分には香椎宮に到着し参拝した後、境内で古峯及び同宮宮司の講話を聞いている。

昭和三年（一九二八）四月二五日、古峯は各組長を伴い、職員生徒を代表して東公園招魂祭に参拝している。

昭和四年（一九二九）六月一日、新講堂で古峯を含む勤続職員の表彰式が行われ、五名の勤続者の写真が菁莪堂に掲げられた。同年一〇月二日、伊勢神宮式年遷宮のため遙拝式が挙行され、古峯が講話を行っている。

昭和五年（一九三〇）、福岡県は教育の刷新、職員整理の方針を打ち出す。これにより、永年勤続者が相次いで学校を去ることになった。益田古峯も五月二一日付けで三十年間務めた修猷館を退職する。満六十三歳であった。七月二七日に福岡県公会堂（西中洲）において、修猷館卒業生が謝恩会を催している。

退職後も修猷館との縁が切れたわけではなかった。この年には職員による研究会などが発足しているが、その一つである「国漢科研究会」は、毎週木曜日の放課後に、古峯を講師として招いて『荀子』の講義を聴いたようである。

また、同僚であった松原伍藤氏によれば、退職後も漢詩同好の士を集めて、「玉壺吟社」という作詩会を興し、その活動は古峯逝去の前まで続いたと言う。同氏は、「先生のご存在は確かに修猷館の一つの大きな誇りであった」と記している『修猷館物語』（修猷通信発行、一九六二）所収「忘れ得ぬ人々」。

初代の雑誌部部长として、明治三五年から十年間、さらに大正二年から二年間、前後十二年間、刊行に当たって古峯が尽力した『同窓会雑誌』は、大正一五年に『学友会雑誌』と改称して年二回発行していたが、昭和六年（一九三三）からは年一回の発行となり、雑誌名も『修猷』と改題された。表紙は古峯の筆になる「修猷」の二字を濃紺の横長方形の枠内に白く抜きだしたものであり、この年の一月二五日発行の号から昭和二〇年まで続いた。また、この年に『菁莪』が発行される。これは、大正七年（一九一八）から卒業生の場として『同窓会雑誌』（のち『学友会雑誌』）の巻末に付された「菁莪」の項が、別冊として独立したもので、一月五日に第二十六号（通巻）として刊行される。『菁莪』の表紙題字も、『修猷』同様に古峯の筆になるものであった。

ここで時代を遡って、『益田古峯漢詩鈔』所収の漢詩によって、古峯の交遊関係などを中心に見ていくことにしよう。

五 漢詩人の足跡

古峯が修猷館の同窓会雑誌部長になつて『同窓会雑誌』が発刊された明治三五年（一九〇二）、鳳鳴書院時代の恩師である楠本碩水の古稀を祝う会が四月に佐世保で催され、一〇月には記念の『碩水先生古稀引翼集』が出版される。古峯も「奉賀楠本碩水先生七秩」という漢詩を寄せている。『益田古峯漢詩鈔』には収載されていないので、次に掲げる。

圭山 柏蒼々

圭山 柏蒼々

鯛浦 水汪々

鯛浦 水汪々

先生居於此

先生 此に居り

江山表休祥

江山 休祥を表す

万鍾非所願

万鍾は願う所に非ず

見幾早帰郷

幾を見て早に郷に帰る

韜晦名益顯

韜晦するも名は益ます顯わる

高風人所望

高風は人の望む所

存心与窮理

存心と窮理と

学問見主張

学問 主張を見わす

凜々忠孝説

凜々たる忠孝の説

綱常為有光

綱常 有光を為す

今茲登七秩

今茲に七秩に登る

神身両堅強

神身両つながら堅強

不須神仙術

神仙の術を須いず

自有長生方

自ら長生の方有り

汪汪頃水

汪汪たる万頃の水

先生徳無量

先生 徳無量

蒼々百尺柏

蒼々たる百尺の柏

先生壽無疆

先生 壽無疆

この前年、明治三四年（一九〇二）六月に祖父逸叟が逝去するが、古峯は直ちに碩水へ報告していることが楠本家書簡（九州大学所蔵）の一通から分かる。

祖父逸叟儀久之病氣に御座候

処養生遂に相叶不申只今致死去

候間不取敢御報知申進候

頓首

六月十九日

午後九時

益田祐之

楠本先生

明治四一年（一九〇八）春、古峯は母を伴い京都、奈良、吉野、伊勢、大阪などを旅している。往復十三日、その間に五十絶句を作る。「ふも幽莽、誦するに足らずと雖も、亦た是れ母子行樂の記念にして、棄去するに忍びず」として、「陪游五十絶」のうち十八首を『益田古峯漢詩鈔』に収めている。その末尾に次の「帰家」の詩がある。

阿母有歌兒有詩

阿母は歌有り 兒は詩有り

春風随处費清思

春風随处に清思を費やす

帰来探棄無余物

歸り来りて棄ふくろを探るに余物無し

一卷好留談笑資 一卷留むべし談笑の資

また、二年後の明治四三年（一九一〇）夏、上京の機会をとらえ、母を奉じて東北を旅行している。前二回の旅で日光、松島を見ることができなかったからである、と「続陪游稿」の序に記している。七月二三日に出發し、八月二七日に帰宅するという長旅であった。

大正四年（一九一五）、古峯は「登古処山」という詩を作っている。

不上斯山三十年

斯の山に上らざること三十年

眼中林壑翠依然

眼中の林壑 翠依然たり

群巒缺処更回首

群巒缺くる処 更に首を回らせば

筑水洋洋流入天

筑水洋洋として流れて天に入る

この年、古峯は数えの五十歳であった。古処山とは故郷秋月にある靈峰で、古峯という号はこの山の名から取ったものである。三十年とあるから、かつて菊池惺堂と共に久方ぶりに九州に帰った頃以来ということになる。

ところで、古峯は四人の息子に恵まれるが、長男を良彦、次男を康彦、三男を豊彦、四男を直彦と言った。³⁰ 次男康彦は海軍兵学校・第四三期（大正三年）の卒業で、大正五年（一九一六）四月二〇日、横須賀軍港より遠航する。第一次世界大戦中である。古峯は出航を見送り、「自愛、祇だ応に王事を尽くすべし」と七絶で詠っている。康彦は翌年の末には軍艦八雲に乗りシンガポールに至る。大正七年（一九一八）七月、三男豊彦が高等学校入学試験に及第し、八月に朝鮮・満洲巡遊の旅に出かける。

大正九年（一九二〇）に、恩師碩水の甥である楠本君翔（正翼）に寄せて鳳鳴書院を回顧した前掲の詩が見えるが、この時期の交遊関係を『漢詩鈔』に見ることにする。先ず、「栗本翁」の名前が頻出する。早いところでは、明治四二年頃、「栗本勿用翁（名は義秉）の挂冠の報を得て、即ち賦して懷を寄す。」と見える。栗本勿用は「嘗て職を爵陵島に奉じ、又滿洲安東県日本民団学校長と為る」とあり、その後、福岡の東部、箱崎に居を移したようで、大正四年（一九一五）一月には、「栗本翁の函崎の僑居を訪う。鋤柄翁も亦た在り。快飲快談、一絶を得たり。」として、次の

七絶が見える。

客是畸人主逸民

客は是れ畸人 主は逸民

浩歌醉舞発天真

浩歌酔舞して天真を発す

塵中亦有無塵会

塵中亦た無塵の会有り

一洗胸中万斛塵

一洗す胸中万斛の塵

古峯と栗本勿用翁とは、小梅の思誠塾以来の關係であつたことが、大正九年の「懷を栗本翁の岡山に在るに寄す」という次の詩から分かる。

無奈世途險

奈んともする無し 世途の險なるを

一朝又別離

一朝又た別離す

回首四十年

首を回らせば四十年

東西相追隨

東西相い追隨す

月中割瓜処

月中 瓜を割るの処

雪裏煮猪時

雪裏 猪を煮るの時

三杯花前酒

三杯 花前の酒

百篇灯下詩

百篇 灯下の詩

早有卜鄰約

早に卜鄰の約有り

終無相宅期

終に相宅の期無し

父執君独存

父執君独り存す

慇懃惜鬢絲

慇懃に鬢絲を惜しむ

「月中割瓜処」以下の四句は、新村出の前掲短歌に見たように、佐原の栗本塾での生活振りを彷彿とさせるものである。「栗本勿用翁（名は義秉）」とあるが、栗本義喬との關係がもう一つはつきりしない。「父執君」（父の友人）と

あるのは、思誠塾の同門の意と解せられる。いずれにせよ、この栗本勿用も大正八年頃には福岡を去って岡山に住むことになったようである。この時期、「栗本翁、我が福岡を去りて已に一年。悵然として懷を寄す」、「茉莉花盛んに開く。栗本翁を懷う有り」といった詩を作り、しきりに栗本翁を懷かしんでいることがわかる。

また、この大正九、一〇年頃に、「中山森彦博士を訪う^{おとこ}」という詩を作っている。

図書堆裏謝塵縁

図書堆裏 塵縁を謝し

斯道商量思入玄

斯道商量し 思入玄に入る

一話一杯春景永

一話一杯 春景永く

滿庭竹樹雨如煙

滿庭の竹樹 雨 煙の如し

中山森彦博士（一八六七—一九五七）とは、九州帝国大学医学部（第二外科教室）教授のことで、美術評論家、美術品蒐集家としても有名な人物であった。古峯との関係は定かではないが、中山森彦博士の旧藏書並びに仙厓の絵画を含む著名なコレクションは、その弟である中山平次郎博士の旧藏書と共に、昭和三四年（一九五九）、九州大学文学部に「中山文庫」として寄贈されることになる。この詩は、大正六年（一九一七）に既に退官していた中山森彦博士の人となり^{（註）}を、短くもよく詠じたものと言えよう。

さて、大正一一年（一九二二）八月五日、上京していた古峯は、恩師である大橋陶庵の四十回忌辰に当たって、次のような漢詩を賦し靈前に供えている。

一去仙遊四十春

一去仙遊 四十春

眼前事事追時新

眼前の事事 時を追うて新たなり

斯文將墜人空老

斯文^{しぶん}將に墜ちんとして 人空しく老い

白髮鬢逢忌辰

白髮鬢^{さんざん} 忌辰に逢う

八月八日には、在京の修猷館門人二十一名が東京駅樓に宴を張ってくれる。「意氣跌宕、談論風発して、情懷綿々、手を分かつに忍びず。三更始めて散ず。」と序す詩に、「語音先ず喜ぶ、家郷に似たるを」とあるのが面白い。

翌一二年（一九二三）、「八月二十九日、暁を冒して秋月に赴く」の詩の第二首に次のようにある。

一路芒鞋踏曉光

一路芒鞋ぼうあひ 曉光を踏み

涼風何処送荷香

涼風何れの処よりか荷香を送る

宿雲漸散溪声近

宿雲漸く散じて溪声近く

眼底青山是故郷

眼底の青山 是れ故郷

古峯は少なくとも年に一度は秋月に帰省している。そこは、彼にとつて唯一の故郷であつた。その彼が福岡に戻つてすぐ後のこと、九月一日、関東大震災が東京を襲う。友人知己の中、消息不詳の者も多く、「憂苦して寢食を安んぜ」ざる日々が続く。十一月二七日によりやく菊池仲昭の書簡が届き、余りの惨劇に胸打たれ漢詩を作り返信している。歳末に古峯は、「国歩艱難、之に加うるに天殃・人禍相い尋いで至る。憂耿の余、亡叔慶堂君（益田静方）を懷うこと有り」と題序して、次の詩を作っている。

邪說誣民君早知

邪説民を誣しう 君早に知る

澄清直欲張綱維

澄清直ちに綱維を張らんと欲す

偽朋爭利媚豪富

偽朋利を争い 豪富に媚び

曲学乱真誇怪奇

曲学真を乱し 怪奇を誇る

災禍時興或天意

災禍時に興る 或いは天意

飢寒荐至半人為

飢寒しきり荐に至る 半ばは人為

遺蹤難繼身空老

遺蹤いしやう継ぎ難く 身空しく老い

泣読従容絶命詞

泣いて読む 従容たる絶命の詞

「絶命の詞」とは、言うまでもなく叔父益田静方最期の漢詩を指す。世の乱れを憂い、これを正そうとして志半ばで倒れた静方無念の思いが、常に古峯の胸中にあったことがこの詩からも分かる。

翌年、大正一三年（一九二四）八月、古峯は朝鮮に遊ぶ。京城、仁川、鉄原、金剛山、平壤と、往復十六日間の旅

であつた。翌一四年（一九二五）二月三日は、亡叔慶堂君（益田静方）の五十回忌に当たつた。次の古詩一篇を賦し、霊前に供えている。

碧血入地五十年

又逢忌辰万感牽

一幅画像留生色

精神磅礴有遺篇

當時新政功未半

誰排正義弄私權

国威不振綱維弛

西来妖氣欲蔽辺

成敗天也安暇問

憂憤直為天下先

取義成仁平生志

学有淵源豈徒然

世運滔滔去不返

白髮老姪淚空漣

招魂今日再拜告

清白独有衣鉢伝

また、昭和二年（一九二七）の「偶成」には次のように見える。

老伍青衿忘鬢皤

殘生未許付煙蓑

碧血 地に入る五十年

又忌辰に逢うて万感牽なる

一幅の画像 生色を留め

精神磅礴として遺篇有り

當時新政 功未だ半ばならず

誰か正義を排して私權を弄す

国威振わず綱維弛み

西来の妖氣 辺を蔽わんと欲す

成敗は天なり 安くんぞ問うに暇あらんや

憂憤直ちに天下の先と為り

義を取り仁を成すは平生の志

学に淵源有り 豈に徒然ならんや

世運滔滔として去きて返らず

白髮の老姪 涙空しく漣たり

招魂今日 再拜して告ぐ

清白独り衣鉢の伝有り

また、昭和二年（一九二七）の「偶成」には次のように見える。

老いて青衿に伍し 鬢皤を忘れ

殘生未だ煙蓑に付するを許さず

斯文一脈託何処

斯文の一脈 何処にか託せん

新学紛紛岐路多

新学紛紛として 岐路多し

還暦を越えた古峯は、自らのことを「老いて青衿に伍し、鬢鬢を忘れ」と述べているが、それは、「斯文（儒学）の一脈」を後世に託そうという強い意志があったからに他ならない。これに対する「新学」とは西洋の学問を指すのであろう。多くの岐路に対し、進むべき一筋の道（一脈）を示すという使命感を、古峯は生涯持ち続けたのである。同じ年、旧友菊池惺堂の新春の詩に次して詩を作る。

此心欲與古人論

此の心 古人と論ぜんと欲す

雲水茫茫易斷魂

雲水茫茫 魂を斷じ易し

旧夢綿綿到何処

旧夢綿綿 何れの処にか到る

墨陀堤畔古梅村

墨陀堤畔すみだ 古梅村

隅田川河畔の古（小）梅村とは、もちろん大橋陶庵の思誠塾を指している。菊池惺堂らと共に学んだ思誠塾は、古峯の学問の原点であったと言える。

昭和三年（一九二八）五月、福岡県教育会の派遣により、他の十名と共に今度は台湾を視察する。台北から台南まで、往復十六日間の旅で、古峯はその詩稿「台湾遊草」の序において、「勝を探り、風を觀、古を弔い、今を察し、得る所すゑと為さず」と記している。しかし、帰国後、肺炎に罹り、死生の間を彷徨さまようことになる。十日余りしてようやく病は癒える。親友菊池惺堂が遠來、見舞いに駆けつける。喜んで賦した詩に、「往時重ねて談じ、感慨多し。梅村の旧社、独り君存するのみ」と見える。

次の詩は昭和四年（一九二九）、秋月新富の浄寛寺（浄土真宗）境内にある益田家累代の墓に参拝した時に詠んだものである。

秋月城辺墳墓地

秋月城辺 墳墓の地

年年一度遠駆車

年年一度遠く車を駆る

乱山影裏尋荒寺

乱山影裏 荒寺を尋ね

流水声中訪故居

流水声中 故居を訪う

今日巖花折親薦

今日 巖花^{がんか}折りて親しく薦め

平生徑草儼人除

平生徑草 人を儼^{やむ}いて除く

他時幸遂帰休志

他時幸いに帰休の志を遂げなば

兆上買田躬自鋤

兆上に田を買いて躬^み自ら鋤さん

これに続く次の詩は、秋月の石原三光の墓地に埋葬された益田静方の墓に参つて詠んだものである。³² 第五句には静方絶命詩中の辞を引いている。

雨悼風悲五十秋

雨悼み風悲しむ 五十秋

孤墳寂寞倚荒邱

孤墳^{せきぼん}寂寞として 荒邱^{きゅう}に倚る

飛雲斷靄山周匝

飛雲斷靄 山周^{しゅうそう}匝し

怪石疎杉水急流

怪石^{そくせん}疎杉 水急流す

呼賊呼狂任他笑

賊と呼び狂と呼ぶ 他の笑うに任す

憂民憂世那時休

憂民憂世 那^{いづ}れの時か休^{やす}まん

九原有識亦応惜

九原識る有り 亦た応に惜しむべし

小姪如今空白頭

小姪如今 空しく白頭

六 晩年

修猷館を退職した翌年、昭和六年（一九三二）夏、古峯は静岡の臨濟寺にて関口隆吉の墓参をしている。³³

来拝又為追慕詩

来拝し又為^{つく}る追慕の詩

哀情唯有使君知

哀情唯だ使君の知る有り

三州千載伝仁沢

三州千載 仁沢を伝う

何用道旁鐫頌辞

何ぞ用いん 道旁 頌辞を鐫るを

次いで、東京谷中の天王寺墓地にて大橋陶庵の墓参をする。「時に先生五十回忌辰後十日なり」と記している。八月一六日である。

月一六日である。

五十年光容易移

五十の年光 容易に移り

鳥声樹影不勝悲

鳥声樹影 悲しきに勝えず

青苔又灑追思淚

青苔又灑ぐ 追思の涙

記得春風侍立時

記し得たり 春風侍立の時

『漢詩抄』では、これらの詩の後に、箱根小湧谷温泉、箱根古閑址、芦ノ湖、修善寺を詠んだ詩がある。このように退職後の古峯は、各地を旅行して漢詩を作ったり、修猷館の卒業生に招かれたりと、悠々自適の日々を過ごしていたが、昭和七年（一九三二）、突然の不幸が六十五歳の古峯を襲う。二月四日、次男・康彦が漢口にて戦没する。同一九日、遺骨が福岡に帰る。二三日、大長寺（西山浄土宗）にて葬儀が営まれる。この間、「児、康彦を哭す」という長詩を始めとして、何篇かの詩が作られる。「康彦、壬申二月四日を以て漢口に歿す。越えて十九日、遺骨始めて帰る。痛悼、此の作有り」として、次の詩が詠まれている。

得計旬余寐不眠

計を得て旬余 寐ぬれども眠らず

將疑將信意酸然

將に疑わんとし將に信ぜんとし 意酸然

忽迎棺櫬猶如夢

忽ち棺櫬を迎えて 猶お夢の如し

淚眼低迷一炷煙

淚眼低迷す 一炷の煙

その年、康彦の初盆を迎える。「楠本伯善、素心一鉢を贈らる。越えて数日、大富武も亦た玉華数茎を分かつ。素葩瑩潔、清馨縹緲、共に逸品為り。珍賞して措かず、此れを賦して喜びを記す。」という詩が見える。楠本伯善と

は楠本君翔（名は正翼）の長子で当時九州帝国大学教授であつた楠本正繼（字は伯善）のことである。⁽¹⁵⁾

昨得素心今玉華

昨は素心を得 今は玉華

幽人清福亦堪誇

幽人の清福 亦た誇るに堪えたり

孤高不是塵中物

孤高 是れ塵中の物ならず

許否追陪脫世譚

許すや否や 追陪して世譚を脱するを

翌八年（一九三三）四月に康彦が靖国神社に合祀されることになり、古峯は臨時大祭を拝するために上京する。その折に、東京にて旧友菊池惺堂と岡彪村を訪問している。「菊池惺堂を訪う。病に臥すこと数旬。謝客已に久し。乃ち対談少時にして辞去す。激病を畏るればなり」として次の詩を詠んでいる。

尋来忽駭臥沈痾

尋ね来つて忽ち駭く 沈痾に臥するを

回首故交無幾何

首を回らせば 故交幾何も無し

欲去門前還徙倚

去らんと欲して門前 還た徙倚す

春風一路落花多

春風一路 落花多し

これが恐らく、親友との最後の別れとなつた。

この年、四男直彦を伴つて秋月に墓参に行く。第二首に次のように詠む。

血嗣連綿三百載

血嗣連綿 三百載

先墳又拝青山際

先墳又拝す 青山の際

児曹不識仰余慶

児曹は識らず 余慶を仰ぐを

為掃莓苔說家系

為に莓苔を掃いて 家系を説く

この秋月墓参第二首の詩が、自撰詩稿『古峯詩集後編』の最後を飾る。四百余首の中で、三百年続く自らの家系に言及した数少ない一首である。秋月から始まった古峯の人生は、常に故郷への思いを抱き続けた生涯であつたと言えよう。

昭和一九年（一九四四）四月一〇日、益田古峯は急性肺炎のため逝去する。享年七十七であった。生前の約束により、鳳鳴書院以来、六十年に及ぶ締交の間柄であった岡彪村が、古峯の墓誌銘を著している。³⁶

七 「益田文庫」の書籍

「益田文庫」に収蔵される書物には、明治以降の洋装本も含まれるが、その多くは線装本である。内容的には漢学が主であり、経・史・子・集の四部を概ね包括している。和刻本が大半であるが、中国刊本や写本も含まれる。中国刊本としては次のような書物が挙げられる。

『王文成公全書』王守仁撰、三八卷、二四冊、隆慶元刊

『日講四書解義』陳延敬撰、二六卷、一二冊、康熙一六刊

『楊椒山先生集』楊繼盛撰、四卷、四冊、康熙三七刊

『御選唐宋詩醇』四七卷（卷三二・三三・三三欠）、二四冊、乾隆二五刊

『宋詩別裁集』張景星編、八卷、四冊、乾隆二六刊

『国朝六家詩鈔』劉執玉輯、八卷、八冊、乾隆三二刊

『初唐四傑集』四卷、六冊、乾隆四六刊

『張楊園全集』張履祥撰、八冊、嘉慶二三序刊

『春秋左伝杜注』姚培謙撰、三〇卷、一〇冊、道光七刊

『四書自課録』延珍撰、一六冊、道光九序刊

『避暑録話』葉夢得撰、二卷、二冊、道光二五刊

『勸学編』張之洞撰、二卷、二冊、光緒二四刊

「益田文庫」収蔵書の中で、何と言っても多いのは、次のような江戸期の儒学者の著述類である。

『筆記易本義』中村惕齋著、一六卷、七冊、明和元刊

『筆記読易要領』中村惕齋著、四卷、一冊、元治元刊

『六経略説』太宰春台著、一冊、延享二刊

『古易断』新井白蛾著、五卷、一〇冊、安永五刊

『逸史』中井履軒著、一二卷首一卷、一三冊、寛政一一刊

『春秋左伝雕題略』中井履軒著、六卷、六冊、万延元刊

『新論』会澤正志齋著、二卷、二冊、安政四刊

『閑聖漫録』会澤正志齋著、一冊、文久三刊

『哀敬編』佐藤一齋著、一冊、写本

『關邪小言』大橋訥庵著、四冊、嘉永五刊

『近思録参考』東沢瀉著、二卷、一冊、写本

『葬祭略記』東沢瀉著、一冊、写本

江戸の儒書の中でも特に注目すべきは、崎門学関係書籍である。

『朱書抄略』山崎闇齋著、五冊、延宝九刊

『性論明備録（講義）』山崎闇齋著、宇井默齋説、奥村某記、一冊、写本

『默識録』三宅尚齋著、岡直養校、六卷、二冊、昭和一一刊

『為学要説』三宅尚齋著、岡直養校、一冊、昭和一一刊

『白雀録』三宅尚齋著、岡直養校、二冊、昭和一一刊

『靖献遺言』浅見綱齋著、八卷、三冊、江戸刊本

『講学鞭策録』佐藤直方著、一冊、寛政一〇刊

『強齋先生雑話筆記』若林強齋著、岡直養校、八卷、九冊、昭和一一刊

『強斎先生遺艸』若林強斎著、岡直養校、四卷、二冊、昭和一一刊

『中臣祓講義』若林強斎・西依成斎述、二卷、一冊、昭和一二刊

『幼君補佐之心得 附一志通惠』稻葉迂斎著、一冊、安政二刊

『学思録鈔』久米訂斎撰、岡直養校、二冊、昭和六刊

『四部書』久米訂斎撰、岡直養校、一冊、昭和七刊

『蒙斎隨筆』月田蒙斎著、一冊、大正一〇刊

『蒙斎先生詩集』月田蒙斎著、一冊、大正一〇刊

崎門の書籍を多く収集しているのは、言うまでもなく古峯が鳳鳴書院に入門し、楠本碩水から崎門の朱子学を学んだことによるが、多くの崎門写本を翻刻出版することに情熱を傾けた同門の岡彪村らと終生交遊を保ったからに他ならない。端山・碩水に関する書籍は、以下のように殆どすべてが収蔵されている。

『碩水詩草』楠本碩水著、二卷、二冊、明治八刊

『碩水文章』楠本碩水著、二卷、一冊、明治三六刊

『端山先生遺書』楠本端山著、一二卷、四冊、明治三六刊

『崎門学脈系譜』楠本碩水著、一冊、明治三六刊

『碩水先生遺書』楠本碩水著、岡直養・岡安節編、一二卷、六冊、大正七刊

『碩水先生遺書』楠本碩水著、岡直養・岡安節編、一二卷、四冊、大正七刊

『聖学要領』楠本碩水著、楠本正翼編、一冊、大正八刊

『碩水先生余稿』楠本碩水著、岡直養・貞方研編、一冊、大正一〇刊

『過庭余聞』楠本碩水著、楠本正脩録、二冊、昭和八刊

『日本道学淵源録』大塚観瀾著、楠本碩水増補、四卷、続録増補、八冊、昭和九刊

『碩水先生日記』楠本碩水著、岡直養校、一冊、昭和一一刊

『碩水先生語略』内田周平著、一冊、昭和一〇刊

この他に、『碩水集』と題された写本一冊が存在する。これは、明治八年刊の『碩水詩草』巻上に収録される碩水の詩集である。余元眉の評点が朱で記されている。

次に、古峯の自写本を取り上げてみる。自写本『和楽味廼顧己論要』（「ワカミノコロエ」菊池教中著、一冊）の奥書には、「明治十五年秋九月写於下総佐原常照寺南窓下」と記されている。恩師陶庵が亡くなった翌月のことで、入塾後間もない頃と思われる。また、篠崎小竹「送棚橋大中序」、古賀穀堂「明善堂記」、徳川斉昭「弘道館記」などを抜き書きして「文集」と題した写本（二冊）には、「明治十七年甲申春写於北総佐原五禅房」と記されている。また、既に見たように明治一八年から一九年にかけて、防州保津の沢瀉塾で書写したものに、『大学正文』（二冊）、『靖献遺言批評』（一冊）、『儒門語要』（三冊）がある。さらに、写本『二曲集語要』（四巻、一冊）の奥書には、「明治二十年歲次彊圉大淵献冬十一月中澣於西肥針魚洲鳳鳴書院写畢校読」とある。鳳鳴書院に入門した年のものである。このほかに「益田文庫」には、明治四年に思誠塾で写された『初学課業次第』（一冊）、同じく『西銘詳義』（二冊）、明治七年に思誠塾で写された『陶菴先生詩稿』（一冊）、同じく『拊髀一笑』（一冊）が収められているが、誰の手になるかは未詳である。

最後に、古峯自身の作品について見ることにする。本稿の冒頭に述べたように、古峯には没後に出版された『益田古峯漢詩鈔』（前編・後編）があるが、その原稿は次のような経緯で作られた。修猷館を退職して五年後の昭和一〇年（一九三五）、古峯の古稀を祝って、門下生たちが祝宴を催し、併せて古峯の漢詩集出版を企図した。これに対して古峯は、自分の詩には「鄙俗の詞は無けれども、則ち譏刺の辞は有り、富貴の念は無けれども、慨世の意は則ち存す」るが故に、「家に蔵すべくして、人に示すべからず。子孫に遺すべくして、世に公にすべからず」として、一旦は辞退するが、「門人は猶お子孫のごとし。先生已に子孫に遺さんとす。何^{ナニ}為れど独り門人に遺さざるや」という言葉に、これを受入れることにする（「序」）。そこで四百余首を抄出して、その序文を五月に書き上げている。稿本は、『古峯詩集』と『古峯詩集後編』の二冊に分ち、前者には明治二七年と昭和三年（一八九四―一九二八）の作詩が、

後者には昭和四年（一九二九）昭和八年（一九三三）の作詩が収められている。

前述したように、「益田文庫」には『講余吟草』と題した二冊の稿本が収められている。⁽³⁷⁾ その第一冊は明治一五年から一七年にかけての蛭蛉塾における漢詩草稿であり、第二冊は明治一八年から明治一九年にかけての沢瀉塾における漢詩草稿及び抜き書きである。その後、居処もしばしば移り、漢詩人としても名を成した古峯ではあるが、若き日の習作を生涯手放すことはなかった。

また、「益田文庫」には「題銅鑄自像」と題された一冊の稿本がある。ここには、昭和八年（一九三三）の「題銅鑄自像 并序」以下、昭和九年の「登雲仙嶽」、昭和一〇年の「登阿蘇山 并序」、「日豊游草 并序」など、『古峯詩集』には収録されていない退職後の漢詩稿が収められている。「題銅鑄自像」は、修猷館の卒業生八名が古峯の肖像を鑄造し（彫塑家雨宮治郎作）、額装して贈呈したことに対し厚意を謝して賦したものである。「六十八春秋、自ら顧みて愧恥多し。詩を作りて諸君に謝す。静修此れ従り始まらん」と結んでいる。

おわりに

九州大学「益田文庫」の旧蔵者である益田古峯は、秋月党の挙兵以来、数奇な運命を辿りながらも、良き師友と出会い、江戸以来の伝統漢学・朱子学の中で成長し、後半生は中学の漢文教師として、また漢詩人としての生涯を送った。そして生涯の蔵書は、その死後、運命的にも恩師楠本碩水ゆかりの九州大学附属図書館に収蔵されることになったのである。余談ではあるが、「益田文庫」の設立に際して仲介の労を取られたと思われる故岡田武彦名誉教授の旧蔵書は、二〇〇七年一〇月、秋月に新設された「岡田武彦記念館」に収蔵されることとなった。これまた奇しき因縁と言わべきであろう。

〔注〕

(1) 九州大学附属図書館「教養部分館」は、一九九四年に「六本松分館」と名称を変更した(福岡市中央区六本松)。二〇〇九年三月に予定されている六本松キャンパスの移転に伴い、「益田文庫」所蔵書のうち、貴重書庫に排架されている漢籍・和書など線装本類は、箱崎キャンパス(福岡市東区箱崎)の中央図書館保存書庫へ、またその他の書籍は、伊都キャンパス(福岡市西区元岡)の理系図書館へ移動される。なお、「学内所蔵主要文庫」欄(『九州大学附属図書館要覧2005/2006』『コレクション』)や、同館ホームページの「主要コレクション」欄には、現在のところ、この文庫名は記載されていない。

(2) 「碩水文庫」については、拙稿「碩水文庫余滴―楠本正継教授と九州大学附属図書館―」(『中国哲学論集』第三十三号、二〇〇七)を参照。

(3) 「物品請求及命令書」には次のようにある。

番号：五〇五六五〓五二六五四(備品費)

数量：二、〇九〇冊(五〇六部)

金額：一三〇、〇〇〇円

納入者：益田豊彦

(4) 『益田文庫目録』は、表紙に「九州大学附属図書館教養部分館」と記され、三十六頁、目次一頁で、十進分類法で配列されている(四九三部、二〇九〇冊)。なお、筆者は岡田武彦教授が述べているように、「古峯文庫」という名称が当初のものだと考えるが、図書館において既に「益田文庫」という名称で扱われているので、本稿でもそのように表記することにした。なお、益田祐之氏のごときは、原則として益田古峯と称した。

(5) 『益田古峯漢詩鈔』は三冊帙入で、第一・二冊は古峯自筆をオフセット印刷したもので、第三冊は古峯の同僚であった松原伍藤(辰山)氏による訓読文の活字印刷である。内容は次の通りである。

第一冊：古峯詩集(題箋：益田古峯漢詩鈔 前編) 六十七丁

序（古峯 益田祐之、昭和一〇年五月）

第二冊：古峯詩集後編（題箋：益田古峯漢詩鈔 後編）四十三丁

第三冊：益田古峯漢詩鈔（解説 松原伍藤）百三頁

あとがき（祐之三男 益田豊彦、昭和四二年一月）三頁

また、『益田古峯漢詩鈔』の奥付は次の通りである。

益田古峯漢詩鈔

昭和四十二年三月三十日＊印刷

昭和四十二年四月十五日＊発行

〔非売品〕

著者＊故益田祐之

発行者＊益田古峯漢詩鈔刊行会

福岡市鳥飼三丁目一四ノ三

印刷者＊大日本印刷株式会社

（６）『西日本新聞』朝刊に連載された石瀧豊美「曲折の行路―昭和史と益田豊彦①～②③」（二〇〇八年一月四日～二月六日）を参照。

（７）川上市太郎『秋月黨』（一九二五）によれば、静方は東京より帰郷の後、女見寺の田代忠作宅に私塾を開き、青年子弟を指導していた。「塾は国体、経書、詩文を研修し、撃剣、柔道、相撲を励み、また中央の時弊を論し、天下の趨勢を説き意義に於て堂々たる青年学校である」（同書二四頁）とある。

（８）『秋月黨』（一九二五）の巻首には、「修猷館教諭 益田祐之先生書」として「益田静方絶命詞」が影印で収められている。

（９）関口隆吉は晩年、我国の歴史・地理などに関する書籍の寄附を県下と呼びかけ、久能山に図書館設立を企図するが、死後その蒐集した書物は、長男壮吉により静岡県に寄贈され、静岡県立葵文庫内に「久能文庫」として収蔵される（『静岡県立

葵文庫和漢図書目録・久能文庫之部』静岡県立葵文庫、一九二八。現在、静岡県立中央図書館に久能文庫として所蔵されている。

- (10) 『広辞苑』(岩波書店、一九五五)の編者としても著名な新村出博士である。なお、関口隆吉の伝記としては、関口隆正著『関口隆吉伝』(何陋軒書屋、一九三八)がある。隆正没後にその子・泰が発行したもので、関口隆正撰「顕考黙齋府君行状」(一八九〇)のほか、中村正直撰「故静岡県知事従三位関口君碑銘」(一八九〇)、重野安繹撰「静岡県知事関口君碑」(同年)、関口泰撰「後記」(一九三八)、新村出撰「後語」(同年)を収める。

- (11) 大橋訥庵・陶庵及び思誠塾については、寺田剛『大橋訥庵伝』(至文堂、一九三六)、平泉澄・寺田剛編『大橋訥庵先生全集』(至文堂、一九四三)を参照。

- (12) 関口隆吉は東京時代に三個所住居を移すが、最後は小梅で思誠塾のあとを借りて住んだという(新村出「わが学問生活の七十年」一九五五年、『新村出全集』第十四巻、二七九頁)。

- (13) 当時の佐原に関しては、『佐原市史』(佐原市役所、一九六六)、『佐原の町並—佐原市伝統的建造物群保存地区調査報告—』(佐原市教育委員会、一九七五、『日本の町並み調査報告書集成・第3巻—関東地方の町並み—』東洋書林、二〇〇四)を参照した。なお、佐原市は平成一八年(二〇〇六)の合併により、現在は香取市となっている。

- (14) 螟蛉塾については、前掲『佐原市史』を参照した。なお、栗本義喬は後に第一高等学校の漢学教師となり、宇都宮中学の校長になる(前掲新村出「わが学問生活の七十年」)。佐原では、その後にやはり栗水の娘婿であった石井宗太郎が第二螟蛉塾と称して、明治二九年(一八九六)頃まで開塾していたようである。なお、新村出の「わが学問生活の七十年」には「蜻蛉塾」と見えるが、これは「螟蛉塾」の誤りであろう。

- (15) 平成四年(一九九二)八月に常照寺の境内に建てられた「常照寺縁起」(大龍寺三十五世住職常照寺住職兼務大島全明誌)の石碑を参照した。碑文の最後には次のように記されている。

儒学者・栗本義喬は、幕末より明治二十年頃にかけて、ここに漢学の塾を開いた。塾に学ぶ学徒に、国語事典・広辞苑を編集した新村出博士あり、先生の「懷古の歌」に次の歌がある。

諏訪の岡の ふもとの鄙の 寺小屋に

ただ漢籍の 物学びせし

(16) ここに言う「神風連の亜流」とは、秋月の乱の直前に熊本で蜂起した神風連（敬神党）の一人であったということのようだが、ここに言う「父」が古峯の実父を指すのか、あるいは叔父である益田静方を指すのか、はっきりはしない。後者だとすると、新村出の記憶違いか。いずれにせよ詳細は不明である。

(17) 明治四三年（一九一〇）夏に母を伴って東京より日光・松島・水戸に遊んだ際に詠んだ「過土浦」という漢詩に、わずかにその頃のこと触れられている。

清湾幾曲接江流 清湾幾曲 江流に接す

白鷺紅蓼繞釣洲 白鷺紅蓼、釣洲を繞る

鹿島潮来何処是 鹿島潮来 何れの処か是れなる

烟波渺渺想曾游 烟波渺渺 曾游を想う

(18) 菊池経政は、大橋訥庵の妻・卷子（一八二四〜一八八一）の弟・教中（一八二八〜一八六二）の長子にあたる菊池長四郎（一八五二〜一九二〇）のこと。『大橋訥庵先生全集』（至文堂、一九四三）所載の「大橋菊池両家系図畧」に見えるように、大橋家と菊池家は密接な姻戚関係にあった。

(19) 沢瀉は閉塾前に、門人の一部が鳳鳴書院に行った場合のことを碩水に依頼していたようである。『叢書日本の思想家・46』（明徳出版社、一九八二）所収の荒木見悟著「東沢瀉」を参照。

(20) 鳳鳴書院が建てられた年に碩水が著した「鳳鳴書院記」（『碩水先生遺書』巻六）を参照。鳳鳴書院及び楠本碩水については、藤村禅『楠本碩水伝』（芸文堂、一九七八）を参照。

(21) 「登門録」には「福岡県筑前国福岡区博多洲崎町九十番地土族」と自ら記している。明治三五年（一九〇二）、碩水先生古稀寿賀に際して書かれた「諸方門人通知人名」には、「福岡筑紫郡警固村 益田祐之」とある。

(22) 楠本正翼は、端山没後、碩水の庇護と薫陶を受け、その崎門学頭彰の出版事業などを助ける。拙稿「楠本海山覚書」ある

崎門学者の生涯と著述——『香椎渴』第49号、二〇〇三）を参照。

(23) 楠本端山の妻（名は燕）は近藤良斎（惺蔵）、思斎（収蔵）兄弟の妹であり、その母方の祖父は端山・碩水兄弟の叔父に当たる。

(24) 「福陵新報」については、九州大学所蔵マイクロフィルム版『福陵新報』（日本マイクロ写真、一九六五）を参照した。

(25) 修猷館については、『修猷館七十年史』（福岡県立修猷館高等学校、一九五五）、『修猷館二百年史』（修猷館二百年史編集委員会、一九八五）を参照した。

(26) 『同窓会雑誌』の編輯を通して指導した生徒の一人に中野正剛（一八八六—一九四三、衆議院議員、国民同盟、東方会を結成）がいた。二人の結びつきについては、中野泰雄『父・中野正剛』（新光閣書店、一九五八）、猪俣敬太郎『中野正剛の生涯』（黎明書房、一九六四）等を参照。

(27) 今也我邦文運日開、中学之設置遍於都鄙、可謂盛矣。然師弟之間、動輒相疏隔。是以教育日盛、風俗日敗、学制愈々備、而世道愈々降。雖師道或未盡、抑々亦子弟之不善学也。

(28) 現在、修猷館高等学校には「菁莪堂」創建時の建物はないが、その名は「修猷館式百年菁莪記念館」として残り、図書館、集会室として生徒らに親しまれている。

(29) 『益田古峯漢詩鈔 前篇』四十四丁所収。なお、自筆の書は現在表装が施されて、修猷館同窓会館に所蔵されている。

(30) 古峯の子息については、前掲石瀧豊美著を参照。

(31) また、昭和六年（一九三一）には、二月初九、中山森彦博士、画を携えて過らる。是の日、春雪繽紛、頗る剡溪（せんげい）の故事に似たり。詩以て之を記す」として次の詩が記されている。剡溪の故事とは、晋の王子猷が雪の夜に戴逵（たいき）を訪問した話。

春雪乱紛紛 春雪乱れて紛紛たり

滿眸唯白白 滿眸（ぼ）唯だ白白たり

瘦梅纔洩香 瘦梅（うすうめ）纔かに香を洩らし

飛鳥不留迹 飛鳥 迹を留めず

飛鳥不留迹

飛鳥 迹を留めず

忽会道人過

忽ち会う道人の過るに

偏怡襟韻適

ひととせよろこびに
偏に怡ぶ襟韻の適するを

黄昏送出門

黄昏送りて門を出ずれば

一路没高屐

一路 高屐^{げき}を没す

中山森彦博士については、川上貴子「仙厓と中山コレクション」(『九州大学P&P 大学とアート―「公共性」の視点から研究報告書』研究代表者 後小路雅弘、二〇〇八)、同「中山森彦博士の生涯と仙厓収集」(『中山森彦博士と仙厓展図録』九州大学附属図書館編、二〇〇八)を参照。

(32) 益田静方の墓は、祖先の墓所である浄覚寺墓地から十分程度離れた竹藪の中にある石原三光の墓地に建てられている。前掲『秋月黨』一七九頁に「益田静方墓」の墓碑図がある。同書(一八〇頁)によれば、「法名 真如釈光照信士」と浄覚寺の位牌にあるとされるが、同寺は昭和二三年十一月に火災に遭っているため、現在是不詳。秋月と益田静方、並びに浄覚寺については、田代量美『筑前城下町 秋月を往く』(西日本新聞社、二〇〇二)を参照した。

(33) 臨濟寺の境内にある関口家の墓地には、正面奥に「関口隆吉之墓」という墓碑があり、その手前左右に「大淵院殿霊前」と記された大きな石灯籠が立てられ、裏面には「紀功碑建設者建之」と刻まれている。古峯の詩の末句は、これを評したものであると思われる。

(34) 天王寺墓地にある大橋家墓所には、正面奥に「淡雅大橋知良之墓」が建てられ、向かって手前右側に、奥から「訥菴大橋君之墓」、「大橋氏巻之墓」(訥菴の妻巻子)、「陶菴大橋君之墓」、「大橋氏誠之墓」(陶菴の妻誠子)の順に墓碑が並んでいる。

(35) 楠本正継博士の素心蘭については、佐藤仁著「楠本先生と蘭」(『会報』第四号、九州大学文学部同窓会、一九六一)を参照。

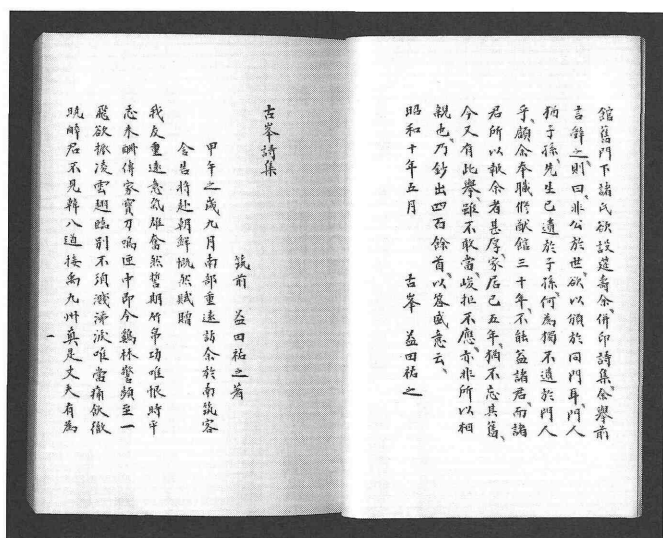
(36) 赤塚光男「岡彪邨翁と崎門の朱子学」(一九六〇)二十一頁を参照。岡彪村、名は直養、次郎と称す。母は近藤家のお出で、楠本端山の妻(燕)の妹に当たる。なお、前出の「益田文庫」所蔵『勸学編』の奥書に見える「岡幸七郎」、同じく『碩水先生遺書』の共編者である「岡安節」は、彪邨の弟で漢口日報社社長であった岡安節(字は幸七郎、号は西門、一八六八)

一九二七）のことである。

(37) 中学修猷館の『学友会雑誌』の第六十三号（一九二七、七）、第六十五号（一九二八、七）、第六十七号（一九二九、七）、第六十八号（一九二九、一二）、第六十九号（一九三〇、七）には、「講余吟草」と題して、古峯の漢詩が掲載されている。

(38) 雨宮治郎は一八八九（明治二二）～一九七〇（昭和四五）。水戸市出身で、一九二〇年（大正九）に東京美術学校彫刻科を卒業。一九二九年（昭和四）第十一回帝展、一九三〇年（昭和五）第十二回帝展に連続特選。帝展、新文展、日展の審査員を歴任。一九六四年（昭和三九）日本芸術院会員。翌年、日本彫塑会会長。作品に、『槍投』（東京国立競技場）、『黒田清隆像』（札幌市大通公園）などがある（『日本人名大事典・現代』平凡社、一九七九による）。

〔附記〕 益田古峯の生涯、及び「益田文庫」の調査に当たっては、福岡県立修猷館高等学校、九州大学附属図書館、並びに静岡県立中央図書館の職員の方々に大変お世話になった。殊に、修猷館高等学校元館長の船津正明氏には特別の御配慮をいただいた。記して感謝の意を表したい。また、千葉県香取市常照寺、静岡市臨済寺墓地、東京都天王寺墓地、福岡県朝倉市秋月新富浄覚寺墓地、同石原三光墓地等を訪問した際にも、多くの方々から援助を受けた。お礼を申し上げたい。本稿を「益田文庫」の旧蔵者であつた故 古峯益田祐之先生
の霊に捧げる。



『益田古峯漢詩鈔』



益田静方墓
(朝倉市秋月石原三光)



益田古峯肖像
(『益田古峯漢詩鈔』)



大橋陶庵墓
(東京都谷中天王寺墓地)



関口隆吉墓
(静岡市臨濟寺墓地)



旧蛭蛉塾 (香取市常照寺)